

身体を使った彫刻鑑賞プログラムの一例

—ロダン《考える人》《カレーの市民》を題材に—

堀 切 正 人

An example of the Sculpture appreciation program with the body:
a case study of Rodin's *The Thinker* and *The Burghers of Calais*

Masato HORIKIRI

2017年9月7日受理

抄 録

彫刻作品を鑑賞する方法のひとつとして、鑑賞者が自らの身体を用いて、彫刻作品の姿勢（ポーズ）を真似することは、きわめて有効である。よりうまく真似るためには、様々な角度からよりよく観察することにつながり、また、自らの身体を使うことにより、知識を得ることとは別の強い印象を得ることができる。なによりもそれは、さしたる準備もいらずに手軽にできるところに、実施上の大きな利点がある。彫刻作品を真似る鑑賞プログラムは、比較的なじみの薄い彫刻という表現形式に向き合うきっかけづくりとして有効であろうし、またそのような簡便で汎用性のあるプログラムを美術館が用意しておくことは、美術館と他施設との連携を進める上でも有益であろう。ロダンの《考える人》と《カレーの市民》を題材とした鑑賞プログラムの一例を紹介し、その利点と問題点を検討する。

キーワード：彫刻、鑑賞、ロダン、考える人、カレーの市民

はじめに

本論は、彫刻作品を鑑賞者が自身の身体を用いながら鑑賞する方法の一例を紹介し、考察するものである。筆者は過去20年間の美術館学芸員勤務において、絵画や彫刻など様々な美術の教育普及活動にたずさわったが、とりわけ2001（平成13）年から11年間の静岡県立美術館勤務においては、この美術館が常設展示するロダン彫刻についての鑑賞プログラムの立案、実施を担当した^(注1)。また館内での活動のみならず、小学校から大学に至るまでの学校教育や、公民館などの社会教育施設への出張授業等、アウトリーチも数多く経験することができた。

それらの活動を行うなかで、彫刻作品を一般の人たち、特に子どもたちにわかりやすく、親しみやすく鑑賞してもらうために、鑑賞者が彫刻作品の姿勢（ポーズ）を、

自らの体を使って真似するという過程を組み入れることが、たいへん有効であると感じるに至った。本論はその経験から得た内容をまとめたものである^(注2)。

むろん個々の活動は個々の実情に合わせて臨機応変に実施されるため、すべての実施方法を共通化し、マニュアル化することは不可能であるが、可能な共通部分を抽出し、プログラム化しておくことは意味のあることと思われる。様々な学習目標や実施方法、場所、対象者に利用できるような基礎的で、汎用性のあるプログラムであれば、それをひとつの核として、多様な教育活動の展開が期待できるからである。

1章 ロダン《考える人》と《カレーの市民》の姿勢についての鑑賞ポイントと、その真似方

「ロダン」や「考える人」はよく知られた言葉で、筆者の経験ではおおむね小学校中学年になるとほとんどの子どもはこの単語のどちらかは知っている（作品としての《考える人》のことを「ロダン」と混同している場合も含めて）。だが、では実際に《考える人》がどのような格好をしていたか、例えば頬杖を突いているのは右手なのか、左手なのかなどを聞くと、漠然としたイメージしか持っていないのが普通である。これは子どもに限らず大人も同様である。そこで、この作品についての知識や情報を得る前に、実際の作品やあるいはその画像を見ながら、その格好を真似し、確認する段階を踏む。

《考える人》の姿勢の特徴として、主に以下の3点を鑑賞者に気づいてもらう（あるいは示唆、指摘する）。

- A 右肘が左太ももに載っている（図1）
- B 足（くるぶし）よりも頭が前が出る（図2）
- C 全身に力を入れている（特に背中中の筋肉の隆起がわかりやすい）（図3）

Aは体を強くひねっている状態で、Bは極端な前傾姿勢を示している。その体勢では前に倒れるので、それを支えるためにCの緊張感が生みだされる。《考える人》は一見、人物が静かに考え込む姿勢であるかのように見えるが、実際にその姿勢を真似てみると、それがひねって傾くという日常生活ではあまり行わない極端な姿勢であることを実感できる。

実際のプログラムにおいては、まずは鑑賞者／参加者（以下「鑑賞者」と表記）が自由に真似し、姿勢の特徴に自発的に気づいてもらうが、その後、その確認作業（あるいは答え合わせ）として指導者／ファシリテーター（以下、「指導者」と表記）が声かけしながら、全員いっしょに真似をする段階を入れる。その際、真似方の指導方法も重要となるが、筆者がよく行った声のかけ方は次のとおりである。

- 0 これからポーズを真似しますが、体がきついとき、しんどい場合は、けっして無理をしないようにお願いします。
- 1 椅子に浅く腰かけましょう。
- 2 背筋を伸ばして、真っすぐ前を見ましょう。
- 3 足首を椅子の下へ入れましょう。

- 4 右手を前に出して下さい。掌を軽く握って内向きにし、口の下、顎のあたりに付けます。
- 5 このまま前にかがむと、右肘が右足の上に乗ってしまいます。(4に戻る)
- 6 そこで、頭は正面を向いたまま、肩だけ左にぎゅっとひねります。顔を左に向けてはいけません。
- 7 その状態のまま、体を前に倒します。
- 8 右肘が左足の上に乗ります。さらに体を前に倒して、くるぶしよりも頭が前に出るようにします。
- 9 前に倒れそうになるので、体全体に力を入れて、支えましょう。

次に《カレーの市民》の場合の姿勢の特徴と、真似する際の指導者の声かけについて。《カレーの市民》は、6体それぞれの単体像と、その6体が一つに集められた群像とがある(東京の国立西洋美術館の前庭に設置されたものなど)。さらに単体像の中にも着衣像と裸像とがある。それぞれに特徴があり、それに即した鑑賞プログラムが立案可能であろうが、ここでは筆者が勤務していた静岡県立美術館の所蔵品、つまり単体像をもとにした例を示す。群像と異なり単体像は、個々の像の周囲を回って様々な角度から観察しやすく、見る死角も生じにくいので、姿勢を真似するには好都合である^(注3)。本論では、6体あるうちの「ユスターシュ・ド・サン＝ピエール」「ジャン・デル」「アンドリュウ・ダンドル」の場合を紹介したい。

静岡県立美術館所蔵の「ユスターシュ・ド・サン＝ピエール」は着衣の単体像である。みすばらしい衣服や首に巻かれた縄などがこの人物の境遇を物語っているが、裸体像に見られる老いた肉体の強烈な印象は軽減されている。しかし、それゆえいっそう衣服から出た腕や足が目を引き、姿勢の特徴もそこに注目することとなる。

- A 左手と左足が前に出る。(図4)
- B 深い前傾姿勢
- C 左膝が体の内側へ向かって折れている。(図5)

とぼとぼと情けなく歩いているように見えながら、実はしっかり体を支えている像である。声かけ(指導)については以下のように行う。

- 0 これからポーズを真似しますが、体がきついき、しんどい場合は、けっして無理をしないようにお願いします。
- 1 左足を一步前に出しましょう。
- 2 左手を前に出しましょう。
- 3 ずっと前かがみになります。左足は踵が浮いて、地面から離れそうになります。
- 4 このままだと、前か横に倒れそうになります。(3あるいは1に戻る)
- 5 左膝をきゅっと体の内側に入れます。そうすると左足一本でなんとか踏ん張ることができます。
- 6 逆に左膝を体の外側へ開いてみましょう。たちまち体は横に倒れてしまいま

す。(5に戻る)

静岡県立美術館所蔵の「ジャン・デール」は、裸像の単体像である。上述の「ユスターシュ・ド・サン＝ピエール」の場合とは逆に、胴体部分の動きを観察しやすい。

- A 両足を開いてしっかり立ち、両手はしっかり握る。(図6)(群像では巨大な城壁の鍵を持つ)
- B 左肘が横ではなく、後ろを向く(肘の内側が前を向く)。
- C 左手首は内側にひねる。(図7)

左右の腕のひねり方が異なることが、この像の姿勢の特徴である。右手は比較的自然な曲げ方であるが、左手は異常な曲げ方になっている。それに連動して、胴体部分の筋肉が複雑な動きを見せる。

- 0 これからポーズを真似しますが、体がきつとき、しんどい場合は、けっして無理をしないようにお願いします。
- 1 足を肩幅に開いて、両足でしっかり立って下さい。
- 2 両手で握りこぶしを作ります。体の前に大きな重い鍵を持っているように想像して下さい。両腕の肘を張って、曲げ伸ばしして、こぶしを上下に動かしてみましよう。
- 3 さて、右手はそのまま、左手を変えます。
- 4 左肘を横ではなく、後ろへ向けます。左脇をしめて、肘の内側を前に向けます。
- 5 その状態から左手首を内側へひねります。
- 6 そして、ふたたび両手で重い鍵を持ち上げるようにしてみてください。
- 7 胸や背中、胴体の筋肉の動きを意識してみてください。

「アンドリュー・ダンドル」は、6体の中でもっとも感情的な姿勢を示している像である。

- A 両手で頭を抱えて、強い前傾姿勢を取る。(図8)
- B 右足を前に出し、左足は宙に浮く(不思議な台座に載っている)。
- C 右足首が90度近く、体の内側へひねられている。
- D 右足の小指側ではなく、むしろ親指側に体重が載る。(図9)

絶望の淵に沈み、今にも前へ倒れそうな体勢であるにもかかわらず、右足一本で体を支え、立って歩いている像である。

- 0 これからポーズを真似しますが、体がきつとき、しんどい場合は、けっして無理をしないようにお願いします(この像はひときわ右膝への負荷が大きいため、十分に注意喚起する。)
- 1 両手で頭を抱えます。
- 2 右足を前に出して、前かがみになります。左足は完全に宙に浮かせます。
- 3 このままだと、前に倒れそうになります。(2あるいは1に戻る)

- 4 右足のつま先を体の内側へ向けます。右膝が痛い場合は、無理にやらず、やめてください。
- 5 右足の小指ではなく、親指の方へ体重を乗せます。右膝が痛い場合は、無理にやらず、やめてください。こうすると前に倒れずに、右足で踏ん張ることができます。

2章 鑑賞プログラムの一例

1章の内容をベースにした実施手順の一例を以下に示す。鑑賞者の対象年齢は、小学生高学年以上を想定している。場所としては、《考える人》の姿勢をするために、机のない椅子だけの部屋で行うことが望ましく、《カレーの市民》の姿勢をするためには、椅子も自由に動かせると便利である。机があって動かせない場合は、机をさけて横座りに腰かけてもらうなど工夫する。事前の準備物としては、作品を紹介する画像を用意する。《考える人》の場合はレプリカも存在するので、それを使用することも可能である^(注4)。

(導入)

- 1 あいさつ、自己紹介、注意事項など
- 2 指導者は、このプログラムが彫刻を鑑賞する内容であることを伝える。「彫刻」から思い浮かぶイメージや印象、知っている彫刻作品などを鑑賞者に発言してもらってもよい。

(《考える人》の鑑賞)

- 3 指導者は鑑賞者に「ロダン」「考える人」という言葉を聞いたことがあるか、知っているか質問。知っている人は挙手させるなどする。多くの鑑賞者が「知っている」と回答する。
- 4 指導者は、本当に知っているのか再度聞く。では、どのような格好、姿勢をしていたか思い出して下さいと質問を重ねる。
- 5 鑑賞者のうち誰かを指名して、代表して《考える人》の姿勢を想像でやってもらう。他の鑑賞者に正しいかどうか見ってもらう。指導者は適時、「よく似ている」などモチベーションを上げるため肯定的な感想を述べる。
- 6 指導者は画像（多方向から撮影した複数枚）やレプリカを提示して、正解を見せる。ロダン館で行う場合は、実際の作品の前に移動する。
- 7 鑑賞者はそれをもとに、各自、観察し、真似をしてみる。二人一組やあるいはグループ単位で、互いに教えあいながら取り組んでもよい。数人あるいはグループ単位で発表させてもよい。
- 8 指導者は《考える人》の周囲を回りながら、姿勢のポイントを説明する。声かけを行いながら、鑑賞者全員で真似をする。
- 9 鑑賞者に姿勢を真似してみた感想を発言してもらう。多くが「きつい」「しんどい」などと述べる。

- 10 指導者は、《考える人》がなぜそのような姿勢をしているのか、そのような姿勢で何を考えているのか、鑑賞者に問いかける。鑑賞者は想像で自由に発言してよい。
- 11 指導者は、《考える人》の制作の経緯を説明する^(注5)。《考える人》はもともとは《地獄の門》という作品の一部であること、地獄で苦しむ人々を見て、考えている人物であることを説明する。《地獄の門》の全体画像(図10)や、《地獄の門》の「考える人」付近の部分画像(図11)などを提示する。ロダン館で行う場合は、《地獄の門》の前に移動し、部分を指示しながら解説する。
制作経緯をどこまで詳しく解説するか、あるいは《地獄の門》をどこまで細かく観察するかは、鑑賞者の年齢や実施時間等により調整する。ただし、例えば「考える人」の足元には地獄へ真っ逆さまに落ちていく人がいたり、背後には悪魔や骸骨によって地獄へ連行される人たちがいたり、さらには頭上には無数の首が連なっていることなどを紹介しておく、鑑賞者はより強く実感を持って次の段階12へ進みやすい。
- 12 鑑賞者はその知識を得た上で、かつ姿勢を真似ることによって得られた感想とをあわせて、《考える人》が何を考えているのか、あるいはどのような心情なのかを想像し、考えを発表しあう。
- 13 基本的に鑑賞者の考えに正解、不正解はないので、指導者はそれぞれの発言を肯定的に受け止め、応答する。ただし《考える人》がのんびりと、適当に、不真面目に、いい加減に考えているわけではなく、真剣に、必死に、がんばって考えている人のものであることは、共通理解として各発言を集約する。
- 14 そうした心情を体全体で表していることを再確認するために、再び指導者の声かけのもと、《考える人》の気持ちになって、鑑賞者全員で姿勢を真似してみる。感想や考えを述べあう。

(《カレーの市民》の鑑賞)

- 15 指導者は鑑賞者に《カレーの市民》6体(もしくは3体)の画像を示す。ロダン館で行う場合は、《カレーの市民》のフロアに移動する。指導者は鑑賞者に自由に鑑賞させながら、「《考える人》のように、がんばっている人はどれでしょう。がんばっていないように見える人はどれでしょう。」と問いかける。
- 16 さらに指導者は「がんばっているのか、いないのか、ポーズを真似して、その人の気持ちを想像してみましよう」と呼び掛け、鑑賞者に自由に姿勢を真似してもらい、感想や考えを発表してもらおう。
- 17 鑑賞者はそれぞれ、この像ががんばっている、この像ががんばっていない、などと発言するが、どれも正解なので(「がんばる」は主観的な観察なので正誤はない)、肯定的に受け止め、応答する。どうしてそう思うのか、どういう所にそう感じるのかなど、気づいたことを発言してもらおうのもよい。
- 18 指導者は、《カレーの市民》の物語、つまり6人が町を救うために自ら人質となることを名乗り出た人たちであることを解説する。6人がみずぼらしい服を着せ

られ、裸足で歩き、体に縄を巻きつけられているのは、人質として敵方へ連行されていく様を表していることも説明する。加えて、例えばユスターシュ・ド・サン＝ピエールが町の長老で、最初に名乗りを上げた英雄であることや、ジャン・デールが裕福な商人で二人の娘を持つこと、アンドリュウ・ダンドルは最後に名乗りを上げた人であることなど、6人それぞれの地位や立場を補足説明してもよい^(注6)。鑑賞者は、これらの情報をもとに、あらためて人物たちの心情を想像する。

- 19 6体を個別に鑑賞していく。指導者は姿勢のポイントを説明し、声かけを行いながら、鑑賞者全員で真似をする。「ユスターシュ・ド・サン＝ピエール」については、この物語の中心人物であり、郷土の英雄であるはずの人物を、ロダンはそれらしく勇ましい姿にしなかったことを考えながら、しかし左足でふんばって立つ強い気持ちや責任感を体感する。「ジャン・デール」は一見力強く見えるものの、腕のひねり方からうかがえる心の動揺や去来する様々な想いを想像する。「アンドリュウ・ダンドル」も絶望の淵に沈みながらも、右足で体を支える心の強さを感じ取る。鑑賞者は感想や考えを述べあう。

(まとめ)

- 20 鑑賞者は、《考える人》《カレーの市民》の姿勢（ポーズ）を真似することによって感じ、考えたことを、発表したり、感想文に書いたりする。あるいは発展させて自分なりの「考える」や「がんばる」ポーズを考案するなどする。指導者は学習目標に応じたまとめを話す。挨拶して解散する。

このプログラム例は、実施状況によって様々に改変して利用する。実施時間が短い場合は、1～10、または1～14までとすることもできる。あるいは1～14をじっくり時間をかけて行う方法もあるだろう。逆に時間に余裕があるなら20の内容をより発展させることも可能である。鑑賞者の年齢層に応じては、声かけの方法など、より細かく可変する必要も生じよう。指導者と鑑賞者の関係も、一方通行的な講座形式で行うことも、逆に双方向的な対話形式として組み立てることも可能であろう。個別学習、グループ学習、どちらでもおこなえる。また、本プログラム内では「がんばる」という語をキーワードとして用いているが、これもあくまで一例であり、学習目標に応じて適切な語に代替することもできよう。

3章 利点と問題点

本プログラムの利点と問題点をまとめる。彫刻は絵画に比べると、一般的にそれほどなじみ深い表現形式とは言い難い。例えば学校教育において、絵画の制作や鑑賞の授業は多いが、彫刻のそれは圧倒的に少ないし、一般社会においても、絵画の展覧会に比べて彫刻の展覧会はそれほど多くなく、彫刻に親しむ機会は少ないと言わざるをえない。野外彫刻は散在しており目にする機会は多いが、鑑賞の対象としてほとんど認識されていないのが実情である。

そのなかで、彫刻作品の鑑賞を行うには、取り組みやすさがまずは重要である。本プログラムの最大の利点は、気軽に取り組めることである。準備物はほとんど不要で、工作もともなわないため、実施場所の制約も少ない。むろん現物の彫刻作品を前にして（つまりロダン館などで）行うのが最良であろうが、画像を見ながらでも行うことができる^(注7)。

次に、彫刻作品の姿勢を真似るためには、作品の前後左右から観察しなければならない。彫刻作品は平面的な絵画作品と異なり、立体的な造形物であるため、様々な角度からの鑑賞が必要である。本プログラムは鑑賞者をそうした鑑賞態度へ自然に誘導することができる。

そして、何よりも鑑賞者が自身の身体を用いて学ぶところに、大きな特徴と利点がある。なじみの薄い彫刻という表現形式について、知識や理論から入るのではなく、真似るという手軽な方法によって身体を用いることは、強い動機づけと印象付けを鑑賞者に及ぼす。よりよく真似るために、よりよく観察しようとするし、また身体が学ぶことは、知識とは別次元の記憶として蓄積されるであろう。

身体を用いた学習法は他分野では様々に研究、活用されているが、美術鑑賞の場合でもその可能性について、より検討されるべきであろう。本プログラムは彫刻作品の場合におけるそのささやかな一例であるが、絵画作品の場合でも、身体表現に特徴のある作例を選べば同様のプログラムは立案可能であるかもしれない。と同時に彫刻作品が基本的に人体を主要なモチーフとした表現形式であるからこそ、このようなプログラムの有効性が考えられるとも言えるだろう。

さらに言うなら、本プログラムはあくまでも彫刻の鑑賞というところに目的を設定したものであるが、むしろこれを導入として使用し、別の学習目標へ導くことも可能であるかもしれない。例えば、より広く身体表現というテーマに敷衍し、前章20で示唆したような、例えばダンスやパフォーマンスの創作へ展開することもできるだろう。

これらの利点が考えられる一方で、問題点も指摘できよう。まず実施にあたって、既述のとおり身体への負荷、怪我の回避には注意せねばならない。また、身体障害者や一時的に体が不自由な状態にある者が参加する場合の実施方法はあらためて考慮が必要である。例えば車椅子使用者や松葉杖をついている者が《カレーの市民》を鑑賞する場合、15～20はより丁寧な配慮や過程、あるいは別のプログラムが求められる。

次に、彫刻作品の姿勢を真似ると言っても、身体の全体を大きくとらえるのか、あるいはある一部分に注視するのか、また後者の場合、どこを取り上げるのかは、プログラム立案者の恣意性に基づいている。それは結局、プログラム立案者が何を学習目標として設定するのかによる。本プログラムは、できるだけ汎用的であることを目指したものであるが、「がんばる」や「立って歩く」という視点に立脚したものである。鑑賞者は姿勢を真似る過程で、まったく別の表現部分に強く注目するかもしれないし、そこから多様な学びの可能性が広がるかもしれない。実施に当たっては、それを捨象してしまわないような配慮や手法が同時に求められる。

と同時に、本プログラムは、彫刻作品の鑑賞方法としても制約的である。彫刻作品

の鑑賞は、姿勢の表現だけではなく、量感や空間性、重さや大きさによる存在感、素材（ブロンズ、大理石、木彫…）の特性、表面や触覚の問題など様々ある。本プログラムはそれらを扱わない。立体的な物質であることに大きな特徴をもつ彫刻作品の鑑賞方法としては、むしろこれらの観点を扱うものの方が一般的であろう。それらを学ぶためには、別のプログラムを用意する必要がある。

また、真似るといふ身体の学びをどう意識化しアウトプットするかについて、本プログラムは具体的な手法を示さない。このことは、このプログラムを仮に学校教育の場で用いる際には、評価の問題とも絡むことであろう。鑑賞者が真似て感じたこと、気づいたことがいったい何かは、指導者と鑑賞者との、あるいは鑑賞者どうしの対話の中で言語化がはかられ発言されたり、あるいは感想文などに書かれたりするであろうが、それをどう有効に引き出すかは、多くのプログラム同様、指導者の手腕にかかっている。またアウトプットの方法は言語化だけではなく、例えば絵や立体品の作成などイメージ化する方法もあるだろうし、鑑賞者自身の新たな身体表現へ展開することもできるであろう。それらの場合は、彫刻作品という物、イメージ、身体を、言語を介在させずに別の物、イメージ、身体へ変換する行為となり、しかも即興で行うのか、熟考して行うのかなどによっても、様々な興味深い取り組みが可能となるであろう。いずれにせよ、評価せねばならない場合は、それぞれの表現特性にあわせた評価指標が別途必要となる。

おわりに

本論で紹介したプログラムは、簡便である一方、限定的な内容である。このようなプログラムを立案することが、今日の美術館にとってどのような意味があるかを最後に考えたい。

美術館教育（博物館教育）は、学習指導要領を前提とする学校教育（初等、中等）とは大きく異なる。学習指導要領は児童、生徒の学年と教科ごとに、それぞれで教えるべき、あるいは学ぶべき内容の基準を定めている。一方、美術館、博物館が対象とする学習者は子どもから大人まで幅広く（ときには異なる年齢層を同時に対象とする）、教材となる作品や資料も多種多様であり、学習目標も学習者や指導者が実施ごとに設定する。その多様性にこそ美術館教育（博物館教育）の豊かな可能性があるわけで、それゆえにこれまでの美術館や博物館の教育プログラムは、個別的、専門的で、特殊な内容を多種多様、できるだけ多く立案しようとする志向があったように思われる。それは各館の個性や、館蔵品の特性を生かすことでもあったろう。

だが、多くの教育普及活動をこなしていく際に、作業の効率化を考え、プログラムの内容の中で使いまわすことのできる部分は共通化しておくのが現実的である。とりわけ、美術館や博物館がいつそう他の諸施設との連携を模索しようとする現況において、汎用性、機動性がある手軽な教育プログラムを用意しておくことは有効であろう。相手先や時間、場所に応じて自在に可変できる基礎ユニットとしてのプログラムを、いくつかの代表的な館蔵品ごとに取りそろえておくことができれば、アウトリーチャ

連携事業の幅はいつそう広がるものと思われる。本論で紹介したプログラムは、その試みのひとつでもある。

注1 マニュアル化されたものとしては、「ロダン体操」（高橋唐子作）や「折り紙《考える人》」（筆者考案）などがある。どちらも静岡県立美術館のホームページ内で詳細を見ることができる。（なお以下の静岡県立美術館ホームページの最終閲覧日は、すべて2017（平成29）年9月1日である。）

「ロダン体操」<http://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/japanese/rodin/education/taisou/index.php>

「折り紙《考える人》」<http://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/japanese/rodin/education/origami/index.php>

注2 彫刻作品の姿勢（ポーズ）や表情を真似る鑑賞事例としては、次の紹介がある。なお、この事例では真似だけではなく、対話、模刻、自由制作などの取り組みもなされている。

岡山万里・高橋敏之「大原美術館における幼児のための彫刻鑑賞プログラム」『美術教育学』第292号，美術科教育学会，2009（平成21）年 pp.8-17

注3 本来なら群像と単体像との関係も考慮すべきだが（群像として組み合わせることを想定して、個々の像の姿勢が考案されている）、本プログラムではその問題には立ち入らない。

注4 静岡県立美術館には、学校へ《考える人》のレプリカを貸し出す制度がある。詳細は静岡県立美術館のホームページを参照。

注5 ロダンや、《考える人》について、またその制作過程についての閲覧しやすい情報、おおよびわかりやすい書籍は以下のものがある。

- ・静岡県立美術館ホームページ内、「ロダン館」

<http://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/japanese/rodin/>

- ・同「ロダン館作品紹介」http://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/japanese/rodin/about_rodin_wing/index.php

- ・『ロダン 地獄の門展』（展覧会カタログ）1989（平成元）年 国立西洋美術館

注6 《カレーの市民》についての情報は以下のものがある。

- ・注5の静岡県立美術館ホームページ「ロダン館作品紹介」

- ・『ロダン、カレーの市民展』（展覧会カタログ）1989（平成元）年 静岡県立美術館

注7 実施経験としては、真似る行為は参加者の年齢層が低いほど気軽に取り組んでくれる。年配者は人眼が気になったり、恥かしさがあって躊躇することもあるので、実施にあたってはそのためらいを軽減する工夫があるとよい。例えば、指導者が率先して真似てみせることはもちろん、導入部で真似る内容であることを最初に説明しておくとか、ごく簡単な準備運動をして体を動かすことに慣らしておくなどの方法がある。



図 1

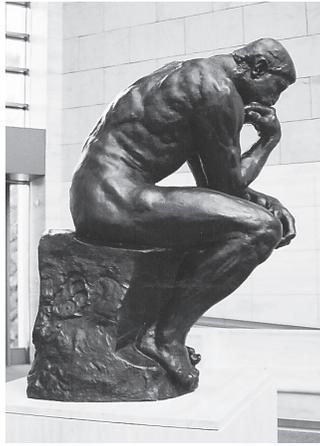


図 2



図 3



図 4



図 5

図 1 オーギュスト・ロダン 《考える人》（静岡県立美術館蔵）正面

図 2 《考える人》側面

図 3 《考える人》背面

図 4 オーギュスト・ロダン 《カレーの市民》より「ユスターシュ・ド・サン＝ピエール」（静岡県立美術館蔵）

図 5 「ユスターシュ・ド・サン＝ピエール」（部分）



図 6

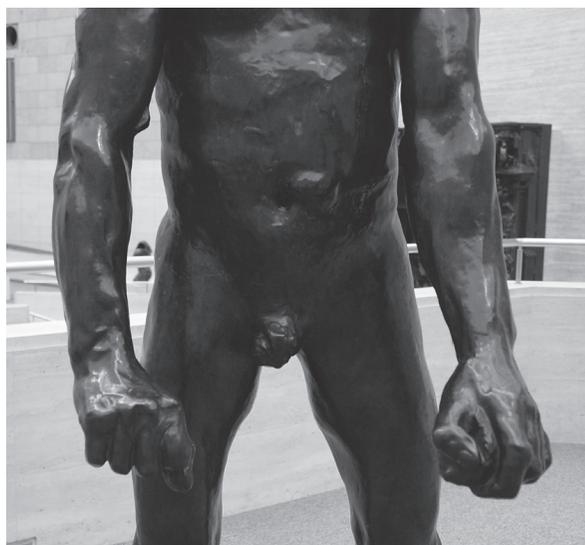


図 7



図 8



図 9



図 10



図 11

図 6 オーギュスト・ロダン《カレーの市民》より「ジャン・デール」(静岡県立美術館蔵)

図 7 「ジャン・デール」(部分)

図 8 オーギュスト・ロダン《カレーの市民》より「アンドリュウ・ダンドル」(静岡県立美術館蔵)

図 9 「アンドリュウ・ダンドル」(部分)

図 10 オーギュスト・ロダン《地獄の門》(静岡県立美術館蔵)

図 11 《地獄の門》(部分)

